

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2017.9) 平成28年度:80.

学童期の子どもをもつ突然の余命宣告を受けたがん患者のスピリチュアル
ペイン

江口 卓也, 田中 理佳, 宮地 実穂子

学童期の子どもをもつ突然の余命宣告を受けたがん患者のスピリチュアルペイン

○江口卓也、田中理佳、宮地実穂子

【目的】

本研究は学童期の子供を持つがん患者が再発を告知されてから、緩和ケア病棟への転院を決断するまでの入院期間40日間のスピリチュアルペインを明らかにすることを目的とする。

【方法】

対象は胃がん、肺転移で余命数か月と告知されたA氏40歳代女性。事例研究（後ろ向き研究）で診療録の主観的情報をコード、カテゴリー化した。

【結果】

前期では、再発の告知から〈将来を奪われることへの不安〉を持ちながらも〈母親役割を果たそうとする〉気持ちが強かった。〈周囲との関係性〉は良好で闘病意欲を高められていた。現状を〈前向きに考える〉ようにしていたが、〈症状悪化に伴う死の自覚〉をすることも増え、死を自覚することで〈母親として残せること〉を考えていた。しかし〈自分の死を受けとめられない〉状態であり実行できずにいた。中期では、治療をして〈帰るという目標を実行〉

しようにしていたが、〈治療への不確かさ〉や〈症状による揺らぎ〉があった。〈娘の成長を感じる〉出来事や、〈いなくなった後に伝えたいことを残す〉ことを考えはじめ〈具体的に今後を考える〉ようになっていた。後期では、〈残された時間を大事にする〉と決断し、〈治療を自己決定〉できるようになっていた。家族の支えや焦らず自分らしくいようと考え〈自分を見つめ直す〉ことができ〈目標を変更〉し、〈自分がない未来に足跡を残す〉準備を進めることができていた。

【考察】

A氏には死への不安や母親役割が果たせないこと、目的が達成できないことなどのスピリチュアルペインがあったと考えられる。前期では、母親役割を果たすために治療し生き延びることが目標であったが、中期になると残された時間をどう過ごすか自身の考えを整理していった。後期には自身がなくなった後のことを考え、できることを実行しようとし、死をも超えた将来を見出していたと考えられる。